

# 蕭紅の初期作品に関する考察

——『跋涉』について——

平石 淑子

東北の生んだ女流作家蕭紅の生涯は僅か三十一年にも満たない。彼女は一九三二年に創作活動を開始して<sup>(1)</sup>、作家としての生涯は十年ということになる。残された作品は多いとはいえないが、若くして人生の辛酸をなめ、「半生白眼冷視に遭うばかり……身は先ず死す。残念です、残念です。」<sup>(2)</sup>という言葉を残して早逝した彼女の生涯を顧みれば、その作品はまた彼女のあまりに生き急いだ生命の軌跡であるともいえる。

私は蕭紅がハルビンで創作活動を開始してから一九三四年青島で「生死場」<sup>(3)</sup>を書くまでの時期を初期と考えている。作品には東北という地方色が濃く現れ、自分たちに加えられるあらゆる圧力に敢然と立ち向おうとする闘志、及び勝利に対する若者らしい希望と信頼が随所に見える。だが注目すべきは、そこに見えたような希望と信頼が、「生死場」以後、彼女の作品の中に再び登場しないということである。

作家蕭紅は「生死場」によって初めて全国に名を知られ、作家としての地位を不動のものとした。魯迅に見出され、高い評価を得たこの作品は、彼女を、「八月的郷村」<sup>(4)</sup>によって同じく初陣を飾った夫蕭軍と共に、抗日文学の旗手という晴れがましい席に推し上げたのである。確かに「生死場」は東北の農民たちの権力（満州国——侵略者）に対する抵抗の文学であり、そこには勝利に対する確信がある。だがその確信が、以後の彼女の作品の中にどうしても見出せない

いうことは、彼女が抗日作家としてこれまで評価されてきたことに対し、一つの素朴な疑問を生むのである。

「生死場」に関してはすでに分析を試みたが、<sup>(5)</sup>本論はそれ以後に入手した新資料——『跋渉』を手がかりに、蕭紅の初期作品の分析を通じて「生死場」への軌跡を明らかにし、彼女の文学の本質を探ろうとするものである。

一

「跋渉」とは、「山や川を越え、苦難の長旅をする」意である。短篇集『跋渉』(一九三三、一〇)は、当時日々の生活にも困窮していた二十五歳の蕭軍と二十二歳の蕭紅が、友人たちの援助と励ましを得てようやく出版にこぎつけたものである。その経緯について、蕭軍は『跋渉』第五版前記<sup>(6)</sup>の中で次のように述べている。

この本の出版費用は、何人かの心ある友人たちが「株」としてひとり五元を出資してくれた。最後に舒群が三十元(後に聞いたところでは、それは党が彼に支給した生活費であった)、陳幼賓兄が十元を出してくれ、残りの端数はハルビン五日画報社社長王岐山君が気前よくまけてくれた——そこでようやく百五十元をかき集めることができたのである。本を売った金は、我々がすべて生活費として「食い尽くし」てしまい、誰にも一銭も返していない。

これがつまり我々の当時の生活状況であった。これらの友人たちに対し、私は永遠にその厚情を忘れない!<sup>(7)</sup>

同じ文章の中で蕭軍はまた「跋渉」という題名に触れ、初めは「青杏」としていたのが最後になって「跋渉」と決まった、と述べている。「青杏」とは、蕭紅の詩「春曲」<sup>(8)</sup>の第二聯、「去年は北平(北京)にいた、／ちようど青い杏を食べる頃だった；／今年の私の運命は、／青い杏よりもなお酸っぱい！」によると推測される。が、最終的に彼らが「跋渉」を選んだということは、苛酷な運命と現実のさまざまな困難を克服し、当局の厳しい目の光る中、自らの生活と生命の危険をも顧みず、敢えてこの小冊子を世に問わんとした若いふたりの並々ならぬ決意の表明に他ならない。

『跋渉』は、検閲を経ず、いわゆる地下出版されたが、「数日もたたないうちに発売を禁止」(蕭紅『商市街』「小冊子」) されてしまった。それから四十六年を経た一九七九年、黒竜江省文学芸術研究所によって、蕭軍がかろうじて蔵していた一冊<sup>(10)</sup>が、一部文字を簡体字に改めた他はすべてオリジナルのままに復刻されたのである。

『跋渉』には、蕭軍(当時の筆名は三郎)の六篇と蕭紅(同じく悄吟)の五篇、計十一篇の短篇が個別に収められている。蕭紅の作品は、目次の順に「王阿嫂的死」(一九三三、五、二二)、「広告副手」、「小黒狗」(一九三三、八、一)、「看風箏」(一九三三、六、九)、「夜風」(一九三三、八、二七)であり、その必ずしも時間にしたがわない配列のしかたと、作品の選択にこそ、当時の蕭紅の姿勢を見ることができると考える。当時、蕭紅の作家生活は僅か一年余を経過したばかりであった。しかし「蕭紅已出版著作目次年表」によれば、その間に発表されたもので『跋渉』<sup>(11)</sup>に選ばれなかった作品も少ない。作品の選択に当って、彼女が特に「跋渉」という大題目を意識したということは十分考えられるのである。

私は、蕭紅の作品には「商市街」の流れと「生死場」の流れが存在すると考えている。前者は主として作者自身の生活との闘争をテーマとすることによって、周辺の社会の苦悩をも浮き彫りにする作品群であり、後者は主として東北の農民たちの生活との闘争、更に彼らがその闘争を卑近な日常生活のレベルから社会のレベルへと拡大していくさまを描こうとするものである。蕭紅はこの後者の流れ(『生死場』)によって認められ、印象づけられたのであるが、その後『生死場』の続篇は書かれず、一方『商市街』はいくつかの作品を経て『呼蘭河伝』<sup>(12)</sup>へとつながっていくということは非常に興味深い。その原因を追求すれば必ず既存の文学史的評価とは別に存在した蕭紅の文学的個性という問題にいき当る。『跋渉』の中にはすでにそのふたつの流れが混在している。即ち「広告副手」と「小黒狗」が『商市街』につながる作品、残りの三篇が『生死場』につながる作品である。

「広告副手」は、生活のために、映画広告の看板を画く広告員の助手になる若い女性を主人公とするもので、その原体

驗はむしろ『商市街』中の「<sup>(13)</sup> 広告員の夢想」に描かれている。また「小黒狗」は、自分の住んでいる長屋の大家の飼犬が子供を産んだという小さな「事件」を描いたもので、『商市街』に該当する作品はないが、例えば「<sup>(14)</sup> 同命運的小魚」と題する作品などと、作者の視点、題材、書き方に於いて非常に緊密な関係があるといえる。

この、比較的軽い筆致で身の小さな出来事をさらりと書いた二篇に対し、他の三篇は全く異なる個性を示す。それが東北に於ける農民の生活の現状とレジスタンス、即ち革命との関わりかたについて、角度を変えながら描いたものであり、それは後に『生死場』の中で壮大に展開されていく。

『商市街』につながる作品に関しては稿を改めることとし、本論では『跋涉』中の三篇の『生死場』につながる作品の分析を通じ、『生死場』の続篇が書かれなかった理由を探り、既存の文学史には書かれなかった蕭紅の文学的個性を追求する端緒としたい。

二

「王阿嫂的死」は、貧しい農婦王阿嫂の身に執拗にふりかかる不幸を描く。彼女の夫は三ヶ月前、屎尿車（起糞的車）を引く労働者として地主に雇われるが、馬が足を折ったために仕事ができなくなり、クビになってからは酒びたりで家にもよりつかない。とうとう頭もおかしくなり、ある日干草の中で寝ているところへ地主の指図で火をかけられ、焼き殺されてしまう。王阿嫂は彼の子を身ごもっているが、地主に足蹴にされたのがもとで、子供を産みおとした直後、その子と前後して死んでしまう。王大哥の焼き殺される場面、また王阿嫂が苦しみの果てに死んでいく場面には、壮絶な臨場感がある。

……王大哥は炎の中でのたうった。張地主の炎の中でのたうちまわった。彼の舌は唇の外に伸び、人間のものは

思えない叫び声をあげていた。(中略) 王阿嫂が燃えさかる火のそばにかけつけたとき、王大哥の骨はすでに燃え尽きていた！ 四肢はバラバラになり、頭蓋は半分に割ったふくべのようだった。火は消えても、王大哥においては村中に漂っていた。

また、

……村の女たちが押し合いへし合い王阿嫂の家の戸口をくぐったとき、王阿嫂自身は炕の上で最後の重苦しい叫び声をあげていた。彼女の身体は自分の流した血に染まり、その時血だまりの中には一個の小さな、新しい動物が同じようにもがいていた。

王阿嫂の目は大粒の輝く玉のように、光を放ってはいるが微動もしなかった。彼女の口は恐ろしげに開かれ、猿のように、必死に歯をむき出していた。

このような鬼気迫る場面がある一方で、物語全体にはけだるい虚脱感に似たものが漂う。この悲惨なストーリーの展開の中に、作者は故意に、無表情な日常のひとコマや、ストーリーとは無関係な周囲の情景を置いてみるのである。例えば夫を殺された王阿嫂がいよいよ腹が大きくなり、仕事に出られなくなって家で寝ているところへ、雇農の頭格の愣三が心配してようすを見に来る場面；彼女の家には七歳になる小環という女の子がいるが、彼女は王阿嫂の実子ではない。みなし子となり、周囲から虐待されている境遇に同情した王阿嫂がひきとって育てているのである。王阿嫂は頭痛と腹痛を訴え、小環は彼女の身を案じて傍らで泣いているが、愣三が帰ると、小環は窓のへりに腰かけて髪を結おうとする。

……小環は窓のへりに這い上がり、まだうまく髪も梳けないような小さな手で自分のほさほさの小さなおさげを直していた。隣の家の小猫が窓のへりに飛び上がり、小環の足の上にうずくまった。猫は暖を取っているかのよう

に、緩慢に目をあけてはまた閉じた。

遠くの山は複雑な朝霞に彩られていた。山肌の羊や牛の群れは小さな黒い点のように、雲霞の中を移動していた。小環はこれらのことにはおかまいなく、ただ自分のぼさぼさのおさげをいじっていた。

また王大哥が殺された直後のことが時間をさかのぼって語られる場面；

……王大哥は張の旦那に焼き殺された。このことを女たちは知らなかった。皆目知らなかった。田んぼの麦は流れ  
る水のように波打ち、煙突から吐き出された炊事の煙は人々の家の屋根の上で渦を巻いた。

各所に点在するこれらの文章は、悲惨な現実を読者の目の前につきつけ、たたみかけるような迫力を失わせているように見えるが、これらの悲惨な出来事が、実は窓辺で髪を結う少女やその膝で居眠りをする猫、朝焼けに染まる山や風になびく炊事の煙などに象徴される平和で長閑な日常の事象と同次元に存在するということに気付く時、その悲惨さはいっそう凄烈である。それらの全てが東北の大地で生きる人々の抗うことのできない日常なのであって、作者もまた彼らと同じ所に身を置く。不幸の全てを日常として容認するしかない生き方、それがこの物語全体に漂う形容しがたい虚脱感を生むのであろう。

そうした展開の中で、ただ一つ異質な存在が小環である。みなし子となった小環を極貧の王阿嫂がひきとって育てる、ということの非現実性はともかく、この物語の登場人物の中で、彼女ひとり名前らしい名前を持っている。何の係累もない彼女は、これらの日常的な幸、不幸を超えて自由であるように見える。彼女の境遇は、家庭的に不幸であったといわれる蕭紅のそれと重なるようにも見え、作者はこの悲惨なストーリーの中に己れの分身として小環を登場させ、全てを日常として容認しようとする自分自身の習性から脱け出んとしたようにも思われる。しかし結果的に小環は、不思議な存在感はあるものの、現実からは遊離してしまっている。いいかえればそれは、東北の農村の苛酷な現状

の中で生きのびていくために、長期にわたって人々の中で培われてきた哀しい知恵が、作者自身の中にも深く浸透し、容易に払拭できないということを図らずも示しているといえる。

### 三

「看風箏」は、老いた父親と革命運動に加わった息子を描いた作品で、ここで初めて権力に立ち向うために運動——恐らく抗日義勇軍——に身を投じてゆく人物が登場する。「王阿嫂的死」から僅か十九日後に書かれたこの作品は、内容的には前作を更に一步、「生死場」に向けて進めたものといえる。

三日前、老人は工場労働者である娘を職場で失った。一人息子は家を出て三年になるが未だに行方が知れない。老人はもはや自分で自分の口を養えぬほど老いており、明日からの生活のあてもない。一方、行方知れずの息子、劉成は、実はある団体に加わり、その活動のために三年前、投獄されたのである。ようやく釈放された彼は、投獄される前と少しも変わらず、感情を表に現さず、冷静沈着である。「情熱が必要な時が来たら、むしろ冷静でなければならぬ。つまり冷静さこそが有効な情熱である。」と信ずる彼は、彼の無数の父親のために実の父親を思い出すこともなく、彼が老人の息子だと気付いた村人が老人にそれを知らせたときも、彼は父親と会うのを避けるように、またどこへともなく旅立ってしまう。それから半年後の正月の朝、広場で杖にすがって子供たちの揚げる凧を見る老人の耳に、革命の大物、即ち劉成が捉えられたという報せが届いたところでこの物語は終わっている。

……それはある初春の正月の朝であった。村の広場で、子供たちが群れ集まっていた。空には鮮やかな彩りの凧が漂っていた。三つ、五つ、近くには大きな凧、遠くには小さな凧、子供たちは手を打ち鳴らし、笑っていた。老人——劉成の父親も、広場で杖にすがって子供たちと一緒に凧を見ていた。そのとき、報せはやってきた！

劉成が捕まったという報せが、老人の耳に届いたのだ!

題名の由来となったこの幕切れは、印象的かつ象徴的である。娘を失い、生活の手段を奪われた老人が半年間どうやって生命をつないでできたのか知る由もないが、正月の晴れわたった空に漂う色とりどりの美しい凧は、老人にはすでに手の届かぬものとなってしまった娘や息子、彼らと共にあったはずの幸福な生活を象徴している。だがその幸福とは? と作者は言外に問う。劉成は父親の願う幸福を幸福とは認めない。彼は、自分たちの幸福の権利を奪うものを直視せず、目先のささやかな幸福をのみ追い求め、ひたすら人生を安穩に送ろうとする近視眼的な人生観——それは強大な権力に対して刃向うことを知らない庶民の哀しい処世術であったのだが——を拒否し、他と共にこそある真の幸福を求めて家を捨て、親を捨てた。それは即ち、老人の描く小さな「幸福」を無残に踏みじることであった。しかし、老人と劉成は対立した存在では決してない。老人は恐らく、息子がいなくなったことも、娘を失ったことも、また自分を取りまく数々の日常的な不幸のひとつとして容認することで、その哀しみに堪えているのであり、劉成の方は肉親の情に引かれることを恐れ、父に会うことを避けるのである。劉成の活動は、当時の中国に於いては必要かつ有意義なものであったに違いないが、それが彼らの肉親たちの小さな喜びや幸福の犠牲の上に成り立っているという哀しさを、この作品は訴える。「王阿嫂的死」で作者は権力に対する自身の立場を明らかにしていないが、この作品では、恐らく作者の理性は劉成を支持すべきであるとしながら、心はなお老人の側に残っている。作者はこの老人の生き方に対し、批判を加えようとはしないばかりか、むしろ温かく、同情的である。それに対して「冷静さこそが有効な情熱」であると信じる劉成に関しては、この含みのあることばが彼の人物像の中で十分証明されず、その結果として彼はあまりにも無表情、無個性である。老人には名がなく、息子には劉成という名を冠したのには、息子の生き方の方に真の人間性復活の道を求めようとする意図があるものと見えるが、実際には作品において老人の方がはるかに生きており、現実的である。こ



のような書き方は、小論「蕭紅『生死場』論」<sup>(15)</sup>ですでに指摘したような、革命の先駆者李青山と愚かな農民たちの描写に酷似している。

#### 四

「看風箏」から二ヶ月半後に書かれた「夜風」は、張という地主一族が君臨する村へ×××——原文「×軍」ともいう。東北抗日義勇軍であろう——がやってくる前後の物語であるが、「王阿嫂的死」、「看風箏」と踏んできた段階をふまえ、その二作で明確にしきれなかった主題をより前面に押し出そうとした意図が感じられる。

雪の積もる寒い日のことである。×××がやってくるというので、張一家は戦々恐々、小作たちをもちり出して警備に当る。一方銃を渡された小作たちは、地主が自分たちを同等に扱ってくれたと大感激して、日頃の恨みもすっかり忘れてしまう。羊飼いの少年長青もそのひとりで、地主から常に言い聞かされている、忠を尽くし、孝を尽くすのはこの時をおいてはないと、すでに安全と見た地主たちが暖かい室内に引きあげた後も銃をかまえつづけ、あげくの果てにすっかり身体をこわしてしまふ。三年前に夫に死なれ、地主の家の洗濯女として働く長青の母親老李は胸を思っており、しばらくの休暇を願い出ると、それまで働いた分の報酬までも反古にされてしまふ。長青も結局クビになり、母子の生活の手段は完全に断たれてしまふ。絶望して父親の墓の前で首を吊ろうという長青に、老李は今までになかった毅然とした態度でいうのである。「ばかなことをいうんじゃないよ。まだ手がある。」隣村が×軍に吸収されて一連隊を成した、という報告が伝えられる。行進する隊列を見守る地主たちの目に映ったのは、彼らの小作たちの姿であった。

……兵士たちは東側の塀からまわりこみ、張二叔叔の家を包囲した！銃が放たれた！

夜ではなく、風もなく、明るく輝く朝日の中で、張二叔叔が最初に地に倒れた。一秒間の冴えわたった時の中で

彼は長青と彼の母親の姿を見た——李婆子もそのの上に坐り、こぶしを振りあげていた……

張一家の滅亡の時を明るく朝の太陽の下に設定したこと、力強く立ち上がった長青、李婆子母子の姿が、張二叔叔の僅か一秒の冴えわたった死の瞬間を選び、彼の目を通して描かれることなど、この幕切れもまた印象的、象徴的である。ここで初めて作者は、虐げられた人々がついに立ち上がるさまを、これからまさに大空にかけあがらんとする、希望と力に満ちた朝の太陽に比するのである。「王阿嫂的死」、「看風箏」と受け継がれてきたテーマは、ここに至ってようやく方向を定め、「生死場」に向けて飛躍しようとするのである。

しかしながら、ここでもなお、虐げられた人々が服従から反抗に転じる軌跡があまりにも短絡的であるという不満が残ることは否めない。長青と李婆子の生活の道が一方的に断たれ、そこへちょうど×軍が来ているという設定だが、彼らがつねづね地主に「×軍はお前たちを殺しに来る」と聞かされているという前提があれば、×軍が実は自分たちの味方であると認識を改め、そこへ身を投じてみようという、彼らにとっては一世一代の大決心をするに至るまでには、かなりの精神的な紆余曲折や葛藤があつて然るべきである。李婆子の家に×軍が滞在したことがあるという短い記述は、彼らの×軍に対する認識を理解する上でかえって混乱を引きおこす。隣村が×軍に加わったという情報だけでは、長青や李婆子だけでなく、李三や劉福、小禿といった小作たちまでが一生に一度の大決断を下した動機づけとしては弱すぎる。このような不満は「生死場」に至ってもなお解消されたとはいえない。この作品で興味深いのは張地主一家の描かれ方である。土匪や謀反兵に脅かされながら財産を守ってきた張老太太と苦勞知らずの息子たち、×軍を迎え討とうとする息子たちの身を案じる張老太太、警備につく兄たちに遅れ、生まれたばかりの我が子を抱く末息子；×軍に対しながら、地主たちはその隊列が脇道にそれてくれることを願って発砲しない。それが純粹に人道的な立場からでなく、ただ自分たちの安寧を願う利己的な気持ちからであったにせよ、地主と小作、×軍という対立がなければ、彼らもまた人

間味にあふれ、小作たちと同じように愚かで愛すべき人々なのだという印象が強い。それゆえ、彼らが銃殺される場面は、新たな権力闘争の犠牲者としての哀感さえ漂うのである。

私は、蕭紅の作品中これほど地主を人間的に描いた作品を他に知らない。蕭紅の出身が地主階級であること、本名が張迺瑩であることと、「夜風」の地主が張一族であることとは単なる偶然の一致であろうか。「夜風」に登場する張一家の人間味あふれる生活ぶり、一方「王阿嫂的死」の張地主の残虐非道ぶりを併せ見るとき、そこに家庭的に不幸であった蕭紅の、肉親に対する憎しみの情と、或いは自分自身でも気付いていない思慕の情とが交錯していると見るのは、あながち穿った読み込みでもあるまいと思う。

## 五

作家が自らの作品集を編む時、作品の配列に無関心であるはずはない。作品が単に時間や類別に従って機械的に並べられる場合を除いて、そこに編者の何らかの意図が働くのは当然である。蕭紅は作品をほぼ時間に従って配列しており、第二作の「燭心」(一九三二、二二、二五)と第三作の「孤雛」(一九三二、六、二〇)の間に移動があるのは、第一作の「桃色の線」と第二作とが、蕭紅と生活を始めた頃の「苦闘」を描くという点で内容的にもまた筆致も似かよった作品であるためと思われる。蕭紅は六篇を総合して自分自身の「跋涉」を示そうとしたが、蕭紅は時間を全く無視した配列をとることによって彼女自身の「跋涉」に対する固い決意を表明した。そして「王阿嫂的死」から「看風箏」を経て「夜風」に至る軌跡が、明瞭に「生死場」を指向しているということは、蕭紅の初期の文学を考える上で、極めて重要であるといえる。

東北の人々の悲惨な生活の場と、それに忍従せず、自分たちを圧迫しようとする力に対して果敢に立ち向おうとする

新しい力の誕生という主題は、順を追って明確になり、それが故郷を追われるという作者自身の実体験をバネにして「生死場」に於いて一応の総括がなされたと考えられる。王阿嫂の悲惨は、例えば王婆や月英といった女たちの苦しみの中に、「看風箏」の老人の哀しみは、例えば新たな闘争に旅立つ李青山の後を追うため、自分にとって幸福と安寧の象徴であった山羊と別れる二里半や、それを見送る趙三の中に、そして長青や李婆子の決意は、「わしは中国人だ！亡国奴じゃない！」という趙三の叫びに呼応して、蒼天を仰いで号泣する村人たちの中に、確実に受け継がれているのである。

「生死場」を世に出すことに尽力した魯迅は、その序文<sup>(16)</sup>にこういう。

……これは勿論略函にすぎず、叙事と写景は人物描写に勝る。だが北方の人々の生に対する必死のあがきが、往々にして力強く紙片を貫くのである。そして女性作家の細やかな観察と卓越した筆致が更に大きく鮮やかさと新鮮さを増加させている。精神は健全であり、文芸を深く憎む者、また功利主義者もしこれを読めば、彼らにとってはたいそう不幸なことだが、全く得る所もない、などということはあり得ないであろう。

さすがに蕭紅の個性を適確に把握した評である。蕭紅は、東北の厳しい自然と、農村に於ける封建的な抑圧の中で、自らを守る唯一の手段として、幸も不幸も全て自然の節理として容認しようとする純朴な人々の群れの中に己れの姿を見出している。雄大な自然の力の前に人間の尊厳などというものは全く無力である、ということをも身をも以て知っている人々は、自分たちに加えられるさまざまな理不尽な力に対し、なるようになる<sup>(17)</sup>と開きなおるしかない。それは哀しい習性ではあるが、大地に足を踏みしめて立つ農民たち<sup>(18)</sup>のしたたかな生き様であった。蕭紅がそういう人々を心から愛し、共感していたということは、「呼蘭河伝」に最も明らかである。そしてまた東北の人々のそうした哀しい習性は、彼女の意志とは別に、彼女の骨の髄にまで浸透していたのである。そういう習性を如何に抵抗のエネルギーへふりむけていく

かということが、彼女の初期の文学の主要なテーマであったわけだが、それは完成を見ぬまま、「生死場」以後断絶して後続を見ない。

一九三四年五月、蕭軍と共に青島に渡った蕭紅が、当地で「生死場」を完成させたのは九月九日のことである。蕭軍「『生死場』重版前記」<sup>(17)</sup>によれば、青島で青島晨报の副刊を編集する一方、「八月的郷村」を書き続けていたが、そのとき蕭紅も少し長い小説を書きたいといだし、蕭軍の激励の下に書き始めたという。長くとも四ヶ月に満たない時間の中で一気に書きあげられたということに、故郷を追われた哀しみが如何に強い原動力となっていたかが察せられる。それぞれの作品をひっさげ、もう後には引けない覚悟で上海に行き、魯迅の面識を得るのがその年の末、翌年「八月的郷村」と『生死場』が奴隸社より出版された後、「東北作家」の名を背負って、一九三七年秋まで上海で作家生活を送ることになるが、彼らの行く手は相変わらず苦難に満ちていた。

……ああ！ 鳥のような歓喜と、火のような愛を抱いていた！ 祖国の海岸を踏み、母の胸にとびこんだのだ！  
だが、この憐れな母の懷で、一年も生活しないうちに、私は知ってしまった。私が感じるものは、結局「どこでも同じ」なのだということ。ひきつぶされそうな圧力と恐怖の中での同様の生活；同じように血なまぐさく、同じように恥知らずで、同じようにすさみ、混乱し、憎むべきで私腹を肥やすことばかりを考える！……満州と同じだ……（蕭軍「『八月的郷村』初版書後」一九三五、六、六）

続いて蕭軍は、日本に反対し、帝国主義に反対し、人類に危害を加えるものに反対するために書きまくる、と決意を表明しており、その決意はまた蕭紅のものでもあったはずである。だがそれ以前に、大都市上海は彼女にとって環境も言葉も全く異質の異郷であった。蕭紅はその喧騒の中で、根無し草のような自分を見たのではないか。一切を自然の節理として容認しようとする彼女の哀しい習性は、東北のあの大地にあって初めてしたたかな生命の泉となり得るのであ

って、大都市の喧騒の中では全く孤立した、理解され得ないものであったろう。蕭紅の鋭敏な感性は、その孤立感の中で、自らの生命の源が枯渇していく恐怖に怯えながら、東北の土地と人々を描き続けることに堪えられなかったのではないだろうか。許広平が「煩悶、失望、哀愁が彼女の全生命力を覆い閉ざした時期があった」<sup>(18)</sup>と当時を回想しているが、魯迅が「『生死場』序文」で評したような上海の人々には健全と映った彼女の精神がそのままに存在し続けることができないほど、上海は単純で素朴な場所ではなかった。だからこそいっそう、「生死場」を書いた蕭紅の精神は彼らにとって健全であったのだ。

結果として、「生死場」は彼女の愛してやまなかった東北に対する訣別の書となった。故郷を追われてこそ「生死場」は生まれた。が、故郷を離れたことで作家蕭紅は文学の上だけでなく、彼女自身の人生の上でも重大な転換を迫られたのだと思う。「跋涉」から「生死場」へと受け継がれてきた主題、軌跡の断絶と『跋涉』の荒削りではあるが若々しい勝利への希望と確信を見る時、彼女の苦悩と挫折の大きさを感しないではいられない。

注

- (1) 一九三二年三月三十日、悄吟の筆名で「幻覚」(《国際協報、国際公園》三四、五)を書き、一九三二年には散文「去年今日」及び詩「春曲」(第一聯のみ『跋涉』所収)を書く。(丁昭年、蕭紅輯録「蕭紅已出版著作目次年表」——蕭軍『蕭紅書簡輯存注 積録』一九八一、一 黒竜江人民出版社 所収)
- (2) 駱賓基「蕭紅小伝」(四六、一一、一九)(《文萃》四六、一一、一四~四七、一、一に連載の後、建文書店より出版)
- (3) 一九三四年九月九日。一九三五年二月、《奴隸叢書》之三として、上海容光書局より出版。
- (4) 一九三四年一〇月二二日。一九三五年八月、《奴隸叢書》之二として出版。
- (5) 平石淑子「蕭紅『生死場』論」(お茶の水女子大学《人間文化研究年報》第四号 一九八〇)

- (6) 蕭軍『跋涉』第五版前記(一九八一、一二、三)、『跋涉』一九八三、一、一 花城出版社)
- (7) 趙鳳翔「蕭紅与舒群」(《新文学史料》八〇、二)によれば、舒群が費用のうち四十元を工面し、出版元の五日画報社を紹介した。また金劍嘯が《国際協報》に広告を出したという。
- (8) 注(1)参照。鉄峰によれば《国際協報》副刊に発表。「蕭江伝略」『文学評論叢刊』第四輯 一九七九、一〇 中国社会科学出版社 所収)『跋涉』には第一聯のみを補白として収める。第二聯は蕭鳳『蕭紅伝』(一九八〇、一二 百花文芸出版社)に転載されている。
- (9) 一九三五年五月一日。一九三六年八月、『文学叢刊』第二集第一二冊として、上海文化生活出版社より出版。
- (10) 復刻版の目次の頁にそのまま印刷されている蕭軍の一九六六年三月二十七日付のメモによれば、一九四六年、彼がハルビンへ戻った折、偶然に古本市で見つけたものという。
- (11) 注(1)参照。
- (12) 一九四〇年二月二〇日。一九四二年、『環星文学叢刊』第一集として、桂林で出版。
- (13) 《中学生》六三(三六、三) 原載。
- (14) 《中学生》六四(三六、四) 原載。
- (15) 注(5)参照。
- (16) 魯迅『且介亭雜文二集』所収。
- (17) 一九七八年十二月二六日。黒竜江人民出版社版『生死場』(八〇、五) 所収。
- (18) 「蕭紅追憶」(《文芸復興》一一六 四六、七、二)

一九八五、一、二〇